

卵を産むための長ーいクチ クチナガチョッキリ

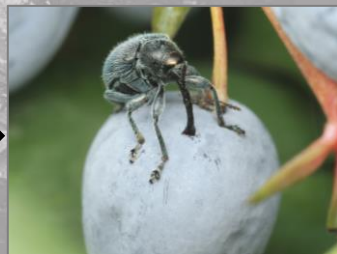
産卵の様子



①長い口吻をヒラギナンテンの実に突き刺して穴を開ける。



②顔が全部めり込んでしまった。そんなに刺すのか！



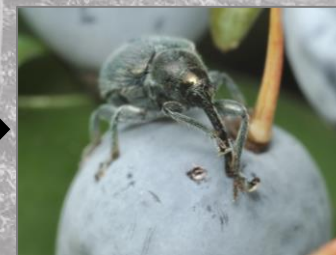
③ずばっと抜いた。口吻にはヒラギナンテンの果の黒い汁がべとりついている。



④ぐるっと回っておしりを穴に差し込んだ。産卵管を差し込んで卵を産んでいる。



⑤もう一度向き直って穴をちょんちょん。穴の入り口を埋めているのかな？



⑥最後は汚れた口吻を両手でふきふき。



クチナガチョッキリ *Mecorhis plumbea* のペア 5/31
密に生えた青い毛が非常に美しい。ゾウムシの仲間。名前の通り口（口吻）が長く、この口吻でヒラギナンテンなどの実に穴を開けて産卵する。産卵後に果実の根もとを“チョッキリ”と切り落とすことが名前の由来。オスはメスより口吻がやや短く湾曲している。ゾウムシ上科オトシブミ科。

猿江公園のヒラギナンテンの実の上に青い毛がとて美しいゾウムシを発見した。長い口吻を果実に突き刺している姿が面白くて見入ってしまった。「ゾウムシ」という名は、見た目がゾウに似ていることからつけられている（長いのは鼻ではないのだが）。この長い口吻で果実に穴を開けて産卵を行っている。

ゾウムシの仲間（ゾウムシ上科）には、オトシブミも含まれる。オトシブミといえば、卵を産み付けた葉をくるくる巻いてゆりかご（揺籃）を作り最後に落とすという習性が有名だ（恋文などを直接渡さず落として拾わせることを“落し文”と言って、これにちなんで名付けられている）。猿江公園で見つけたこのクチナガチョッキリ（オトシブミ科）も、葉を巻いたりはいしないものの、産卵した果実を最後に“チョッキリ”と落とす。

なぜわざわざ落とすのだろう…？調べてみると、植物が虫に食べられた際に出す防虫成分を避けるためだとか、他のチョッキリに産卵させないためだとか言われている。いずれにせよ、1つの果実の奥深くにたった1つの卵を産み、さらには切り落とすなんて大変な作業をわざわざするわけで、外敵から卵を守るためにかなり手の込んだことをしている。以前取り上げたミツボシツチカメムシ（Vol.74,79）などは、卵に覆いかぶさって保護する行動をとっていたが、このクチナガチョッキリの産卵行動も、一種の“子を守るための行動”といえるだろう。虫ごとに生存のための“戦略”がさまざまあってとても面白い。



ヒラギナンテン
葉のふちにトゲがあるのが特徴的。市街地でもよく見かける。



落ちたヒラギナンテンの実
地面を見ると不自然に切断されたヒラギナンテンの実がたくさん落ちていて、どれも穴が開いている（矢印）。この穴がクチナガチョッキリの産卵痕だ。



ヒラギナンテンの実の断面

思ったよりもタネが大きかった。実もタネも柔らかく、カッターで簡単に切ることができた。穴を開けるのはさほど難しくないだろう。



タネの中に産み付けられた卵
タネを割ってみると、卵が見つかった！（矢印）。卵が孵化すると、幼虫はタネを食べて成長し、土の中で蛹になる。